

春燈

8月号
August 2018



主宰の句

安立公彦

ふるさとの昼は長しや蟬の声

緑陰に残る維新や城山径
(西郷終焉の地)

泰然と夏潮占むる桜島

明日は去る故郷の夜の蛍かな

太宰忌や旅の夕餉の冷し酒



久保田万太郎の句

春の灯の水にしづめり一つつづつ

「春燈」昭和三十八年

春燈というのはどうですと、万太郎先生はやや得意そうに言った。諦めかけていた敦先生への返事だった。

かくして俳誌「春燈」は誕生した。

数ある言葉の中から選ばれた「春燈」という言葉。なんとあたたかな響きをもつ言葉であろうか。掲句、水にしづむの表現が万太郎の世界だ。なんとも絶妙だ。こうした万太郎の詩的世界の傍にいられるだけでもうれしい。

近藤 牧男

久保田万太郎の句

親のいふことはいちいちうるうる鳴く

『流寓抄』昭和三十三年

昭和二十二年の九月、三越劇場で上演された一葉作「十三夜」の演出ノートにあった、句。主人公「せき」は望まれて高級官吏の妻となったが、離婚を決意し実家に戻る。母は同情するが父は離婚後の不幸より今の不幸を選べと諭す。万太郎はこの句を念頭に置き演出を行った。季語「ちちろ鳴く」が三人の悲しみをよく表現しているばかりか一句のリズム構成が実に巧みで悲しみが増幅してくる。

金山雅江

燈下集



○ 鈴木直充

一八や起きぬけの水身を落つる
くもりても明るき日なり桐の花
山国や木霊がへしの祭笛
水鏡して祭髪気負ひけり
にはとりを眠らす茅花流しかな

○ 高橋和女

荒神興少年未来かつぎけり
人の世に落し穴あり蝸牛
自分流に生きるほかなし柳絮舞ふ
薔薇育て仄日の身を愛しめり
葉柳の風に抗ふ気など無し

○ 和田孝村

久し振りの銀座鳩居堂風薫る
ちちははのまなざしと思ふ初夏の星
風薫る薫中将てふ人ありき
琴を習ひに子連れて行きしも六月六日なり
あのとときも柘榴の花が咲いてをり

薫風や弥陀の法衣のやはやはと
軽鼻の子にいとしさもらひ帰りけり
竹林の風のたはむれ夏来る
芥子坊主つんつん群れて比丘尼寺
ほうたるや末期まっこのあかりかにかくに

明易し沖に動かぬ豪華船

○ 中村喜美子

新茶汲み口に幸せふふみけり

再会を目で語り合ふ梅雨の駅

鴉鳴き梅雨空さらに重くせり

鮎焼かれ清流恋ふる姿かな

○ 乗鞍三彦

ひこばえの挙りてことの動くなし

花薊心やすやすひらかざり

梅雨の客話ながびく気配かな

夏蕨穴場誰にも教へざる

夏草に埋もれ釣師のもの言はず

○ 柴崎甲武信

母の日や家伝の地粉うどん打つ

そら豆をむくや母ぬて祖母もぬて

ふるさとに残る友垣花うつぎ

万緑や開けつばなしの埴輪の目

ワイシャツの袖たくしあげ五月尽

母の日の花屋の前を通りけり

実梅落つその時猫の目と合ひぬ

麦の秋まこと小さき駅舎かな

略歴の略しきれずよ冷し酒

十薬や通夜ではじめて知りしこと

○ 吉澤恵美子

ゆつたりと海晴れてをり万太郎忌

旅立ちのけふはどこまで夏の雲

門灯の光に馴るる守宮かな

六月の雨の明るき円覚寺

何ごとも心は丸くソーダ水

○ 卜部黎子

更衣身に添ふけふの風はおる

明易し暮しの中のアンジェラス

航跡の引きずる旅愁五月憂し

吹奏楽の少女の弾むばらの苑

終活に至る話題や麦の秋

当月集

安立 公彦選



○ 小山 繁子

ポストまで梅雨の湿りの文をもて

ローカル線茅花流しの穀倉地

あぢさゐの好む白なり剪らず佇つ

回廊は風の抜け道梅雨の蝶

短夜や消灯までのもの想ひ

○ 西岡 啓子

やはらかき山河のほひ走り梅雨

一声につどふ仲間や麦の秋

夏めくや夕べをけぶる街の雨

ふるさとの闇の深さや初蛭

多佳子忌の句帳にはさむ薔薇の紅

○ 上野 進

山藤を滝と見紛ふ熊野路

月朧波を忘るる熊野灘

花祭葎酒山門より出づる

釣り上げて水脈引き寄する堅田鮎

雨の夜は蛙に託す千枚田

○ 藤丸 誠旨

街の井の桶にあふるる水薄曇

夏めくや蛇口は上を向きしまま

紫陽花の音なき雨を見てをりぬ

あぶな絵を返し損ねし梅雨入かな

あをあをと山滴りぬ人ありて(祝800号)

○ 神田 恵琳

観音の風透きとほる溪蓀かな

田植終ふ水に安堵の匂ひかな

初夏や風はこびくる修司の忌

母の字の紙魚の家計簿手に抱く

更衣帯に草書の文字流れ

春燈の句

安立 公彦選

青葉風佃に残る鯉塚

東京 石原 節子

黒南風やハンゲル文字の泊り船

憂きことの箸をすべりし心天
内科外科加齢ゆゑとや柿若葉

風涼し銘酒の香る通し土間

牡丹や曼荼羅界の奈良の旅
菖蒲湯の朝湯に入る至福かな

老鶯や絵馬古びゆく寺庇

卯の花のかをる垣根や回り道
草笛の上手な兄の忌日かな

沁みじみと九十二歳や更衣

兵庫 伊地智浅江

ダンデーな縞目いかにも初鯉

スカートの裾の軽さや夏はじめ
店先の小粋な会話夏暖簾

逝く春や煙が二つ山の端に

Tシャツの色さまざまや通学路
新緑や葉擦れの音の遅しき

アンブルに採らるるわが血目に青葉

夏霧や港を灯す泊り船
絵ごころの無き淋しさや敦盛草

風強る分水嶺や夏の蝶

千葉 吉村さよ手

蜘蛛の予のただ歩み行く沼の昼

出羽三山遙かに白し夏祓

迷ひ剪る薔薇の盛りの花下入

麦秋や機音響く城下町

愛染に願ふ生ひ先花葵

青春を手繰りつラムネ飲み干しぬ

香水に縁なき暮しパリ遠し

兵庫 伊藤 百江

青春を手繰りつラムネ飲み干しぬ



東京 池田 節

東京 横山さくら

千葉 鶴岡 紀代

余言

安立公彦

青丹よし奈良の大路や時鳥

佐藤 信子

「青丹よし」は奈良にかかる枕詞。古来和歌の修辭法の一つだった。へ…寧棗の都は咲く花の薫ふがごとくいま盛りなり」の万葉歌を思い出す。

この句はしかし「奈良の大路や時鳥」として、平城京の繁栄を詠う万葉和歌の絢爛たる都ぶりととは別種の趣を一句にもたらしした。「奈良の大路」からは、「薫ふがごとき」都の有り様が遠くかすかに想像出来、同時に現代の「古都奈良」がみごとに甦っている。季語としては古典的な「時鳥」もよくそれを支えている。枕詞という和歌の伝統を活かし、尚一句を現代俳句とした秀抜な作品である。

言の葉のかくも美しきか傘雨の忌

白杵 游児

今年の万太郎研究会は例年の通り五月六日に浅草産業会館で催された。今回は久保田先生の戯曲「大寺学校」の朗読。俳優の伊藤克、同中村嵐楓子両氏が大寺三平と光長正弘を演じ、卜書の読みを三上程子、外の声を鈴木直充のお二人が勤めた。朗読は全編でなく主要な章のみだった。

「大寺学校」については、平成二年九月号に、中村嵐楓子氏が万太郎戯曲十種の一つとして取り上げて解説している。モデルは万太郎が生まれ育った浅草田原町の小川代用学校。尚春燈会員で浅草文化研究家の鈴木としお氏が、台東区民新聞に、「万太郎没後五十年」という記事を載せている。それによると万太郎生地浅草田原町小学校校歌は、久保田先生の作詞になるという。

前書が長くなった。朗読劇の間、伊藤・中村両優の声を戯曲のコピーを目で追いながら聞いていると、この本に書かれている日本語の美しさが深い感動を伴って身内に充ちてくるのだった。それは朗読する両氏の芸の秀抜さと、万太郎先生の文章の美しさとの調和の賜ものだ。この句の通り。

母の目や白きごはんのつややかに 割田 容子

母の日は新緑の五月、父の日は梅雨の最中の六月。但しこれは日本の季節のこと。共に発祥の地は米国である。例年の春燈誌を見ても、母の日の句が父の日を圧倒する。

この句、五月の本部句会で特々選に頂いた。「白きこはん」に作者の母への感謝の思いが溢れている。さらに「つややかに」により、その思いは倍加する。私たち戦後の生活を知る者にとっては、この中七下五の措辞は千金の価をもつて身に追る。それも「母の日」あつてのこと。

マネキンの耳すます街風薫る

戸辺 信重

これだけ私たちの生活に溶け込んでいる物ながら、「マネキン」という言葉には今も何かしらの異性体を感じる。この「街」は規模としては小振りな街だろう。その街角の飾り窓に置かれたマネキン。新作らしい服を着ているが、日本人離れたその表情には四圍と懸け離れたものが感じられる。作者はそれを「耳すます」とする。物語の中でいつまでも来ぬ主を待つ従僕のように、それは果敢無い姿である。表情の無い物の持つ寂寥感がよく表現されている。

その後の逢はずじまひの祭かな

中野さき江

物語性の深い句だ。例えば一葉の「たけくらべ」の情景を見るような作品と言えようか。作者の句にはそういう背景を持つ句を良く見る。〈言ふや言はずさくら蕊ふる肩ふる〉、〈散る花のその夜の闇を炎えにけり〉。物語は日本文学の一つの伝統と言われる。

この句、好きあつていた二人が、何らかの事情で別れ

かれになる。今年も祭の季語となった。しかし再び逢うこととはない。「祭かな」が非情に一句を締めている。

子をなさぬ子の届けきし柏餅

佐渡谷秀一

「子をなさぬ子」とは即ち作者にとつては「孫のいない子」となる。そのお子さんが端午の節句に柏餅を持って訪れた。親と子と二組の夫婦がその柏餅を食べながらしばしの時を過ごす。作者もお子さんも孫のことには触れない。昭和の時代と異なり、こういう家族は多い。或いはこの後お孫さんが授かる可能性もあると言つもの。しみじみとした表現の中に、親子の情が良く流れている。ちなみに私の郷里では、柏餅の代りに「あくまき」と言う、餅米を盂宗竹の皮に包みあくで蒸して餅状にしたものを食する。

回廊は風の抜け道梅雨の蝶

小山 繁子

屋根のある連絡通路と言えば味気ないが、例えば東大寺の回廊や名苑を結ぶ回廊は風情がある。日本建築の奥深さは連絡のみの用途にも美を添えるところにあると言える。作者はいまそういう回廊を歩いている。或いは博物館かも知れない。折しも梅雨の中、左右の庭苑を吹く風は回廊をも吹き抜ける。蝶がその風に吹かれて作者の行く手に舞う。黒揚羽だろうか。作者はしばしの間その蝶と歩みをともにする。季節の一景が良く表現されている。